

哲学倫理学特殊ⅡM学期末課題

カリクレス

——戦いについて——

所属	文学部哲学専攻 3 年
学籍番号	12000555
氏名	荒金 彰

この擬似的対話篇によって、ヘーゲルなどに代表される哲学者たちが探求してきた、同一哲学の教説の一部を検討する。検討される教説は、快楽と正邪について論じられているプラトンの著作『ゴルギアス』における議論(491E-494E)と主題が重なると思われたため、かの作品に擬えて、その対話参加者であるポロス、カリクレス、ソクラテスを本篇に登場させた。なお本篇は、印度哲学Ⅱ2022 年度期末課題「カリクレス——観念の形成作用について——」の続篇としても考案された。対話形式で記した理由は、論証の段階を明確にするとともに、論証に不備があった場合にはその箇所を後から発見し特定しやすいようにするためである。

ソクラテス 「カリクレス、世の中の非常に多くの事柄が、一種の対立のもとに起こることを、あなたは認めるだろうか。」

カリクレス 「認めます。」

ソクラテス 「それでは、君は対立について考えてみる気にはならないだろうか。それがあなたにとって重要なことであるなら。」

カリクレス 「しかし、考えるだけではどうにもならないことがあります。したがって、それらの対立それ自体が私にとって重大なことであると認めますが、それらの対立について考えることは私にとって重大なことであるとは思えません。」

ソクラテス 「よくはっきりと言ってくれた。愛智に携わらない非常に多くの人々が、口にも出さない意識にもものぼらせることもないが、実は君のような考えを持っていると私には思われる。彼らは、腰を据えて心の底から思索を続けようとせず、容赦なく時が思索に費やされるのに痺れを切らして、近くにある結論と思しきものに飛びついてしまうのだから。その結果後から、導き出された結論が実は間違っていたことがしばしば明白になって、何度も議論を修正せざるを得なくなるのだ。」

ソクラテス 「君の言うところでは、考えは重要ではなく、行為のみが重要であるのか。」

カリクレス 「はい、そのように主張します。考えるだけでは何も変わりません。行為だけが何かを変えるのです。」

ソクラテス 「それでは君は、行為はなせばなすほどよいものだろうか。それとも、単純にそのように言い切ることはできず、適切な行為はなせばなすほど善く、不適切な行為はなせばなすほど悪いと考えるだろうか。」

カリクレス 「適切な行為だけが善く、不適切な行為は悪い、と考えます。なぜなら私は優れた法律制定を多く為す者を優れた統治者と呼びますが、劣った法律制定を多く為す者を劣った統治者と呼ぶからです。」

ソクラテス 「それでは、何が行為を適切で優れたものにし、何がこれを不適切で劣ったものにするだろうか。運によらないとしたら、思慮こそが行為を優れたものにし、無思慮が行為を劣ったものにするのではないか。それとも君は、優れた法律は思慮によって考案され、劣った法律は無思慮によって考案されると考えないだろうか。」

カリクレス 「はい。行為を優れたものにするのは思慮であり、劣ったものにするのは無思慮であると認めざるを得ないでしょう。」

ソクラテス 「あらゆる行為は、思慮を伴っていなければうまくなされないのではないか。」

カリクレス 「そのように思われます。」

ソクラテス 「したがって、対立を主題に考察することは決してつまらぬことではない。もし考察することが何らかの対立についての思慮ある見解をもたらすものであるなら。そしてその思慮ある見解

のもとに、君は行為していくことができるのだから。そして思慮ある見解をもたらさない考察は、無用なものであると言えるだろう。」

カリクレス 「差し当たり、そのように認めておきましょう。」

ポロス 「しかしソクラテス、一部の人は心の奥底で次のようなこともまた考えているのではないのでしょうか。すなわち、『考えることも行為することも、重要なことではない。それらは無駄なことである』と。彼らは続けてこのように言うでしょう。『その知性が万物の原理を把握できるのかも分からない人間が、ましてや人間の端くれであるちっぽけなこの私が、考えたところで大したもののは生じないし、また行ったところで大したもののは生じない。私にふさわしいのは、ただ成り行きに任せて何も考えず行わず、深く悩まぬことである。』」

カリクレス 「そのように考える人々を思索に導くのは難題であるかもしれません。このことは、また別の機会に検討することにはしませんか。今我々三人は、先に言われた議論で合意が取れたのですから、我々三人の間だけでも議論を続けていくことにしませんか。」

ポロス 「あなたがたは先ほど自分たちの間で言われたことを覚えておられないようですね。」

『思索に容赦なく時が費やされるのに痺れを切らして議論を省略するから、後になって、導き出された結論が実は間違っていたことがしばしば明白になって、何度も議論を修正せざるを得なくなる』ということ。もし『人間には諦めの境地がふさわしい』と考える人たちの考えが正しければ、これから言われる議論はのちに引き返されることになりかねませんのに。」

...

ソクラテス 「カリクレス、対立は悪いものをもたらすだろうか、それとも良いものをもたらすだろうか。対立は悪いものであってできる限り解くのがふさわしいだろうか、それともそれは善いものであってできる限り求めるのがふさわしいだろうか。対立は克服してこれを避けるのがよいだろうか、それともそのままに残しておくのがよいだろうか。」

カリクレス 「そのように一度に多くの問いを並べ立てられては困ります。」

ソクラテス 「以上の問いはみなすべて同じ一つのものではないか。なぜなら、悪いものをもたらすものは、悪いものをもたらす限りで悪いものであって、人はまたこれをできる限り避けるのがふさわしいし、また、善いものをもたらすものは、善いものをもたらす限りで善いものであって、人はまたこれをできる限り求めるのがふさわしいからである。以上のことは、これからの議論のなかで常に覚えてもらわなければならぬ。」

カリクレス 「はい、そのように努めます。」

ソクラテス 「しかし一方で、『対立は苦痛をもたらすだろうか』という問いと、『対立がもたらすものは劣ったものであろうか』という問いは、同じものではない。同様に、『対立は快楽をもたらすだろうか』という問いと、『対立がもたらすものは優れたものであろうか』という問いも、両者は同じ問いではない。」

カリクレス 「それはどういうわけですか。」

ソクラテス 「それはこのようなわけである。もし仮に苦痛が悪いものであったなら、苦痛をもたらす対立はすなわち悪をもたらす対立であり、そのような対立は有害なものであって可能な限り忌避するのがふさわしい。また反対に、もし仮に快楽が善いものであったなら、快楽をもたらす対立はすなわち善をもたらす対立であり、そのような対立は有益なものであって可能な限り追求するのがふさわしい。」

カリクレス 「そのようであると思われます。」

ソクラテス 「ただし、以上のことは言われたけれども、『苦痛が悪いものである』とか『快楽が善いものである』とかいったことは言われていない。これらは思惑の道に属する「いかにもありそうなこと」であって、人々の間で広く認められてこそいるが、確実な論証によるものではない。そしてこの不確実な論証のもとに、我々にとって重大な問題である対立について論ずることは、不適當ではないだろうか。」

カリクレス 「そのような『苦痛が悪である』とか『快楽が善である』とかを探究の第一の基礎命題とするは不適當です。対処する問題が重大であるほど、我々は慎重にならねばなりませんから。」

ソクラテス 「したがって以上言われたことも、またこれからの議論のなかで常に覚えられていなければならない。」

カリクレス 「そのようです。」

ソクラテス 「ところでカリクレス、議論、食べるための狩猟、競技、これらの戦い——争いと呼んでも、対立と呼んでもいい、それらのことは大きな問題にしない——は、善いものであると考えられている。」

カリクレス 「はい、一般にはそのように考えられています。」

ソクラテス 「君は、議論、食べるための狩猟、競技、これらがすべて対立の一種であることを認めるだろうか。」

カリクレス 「はい、認めます。」

ソクラテス 「それでは、それらの対立が、善いものであると認めることができるだろうか。」

カリクレス 「ソクラテス、それらのことは一般に認められているにとどまるのであって、しかしそれらが実際に善いものであることは確実ではありません。」

ソクラテス 「よろしい。」

ソクラテス 「一方で、口論、娯楽のための狩猟、戦争、これらの戦いは、先のものとは反対に、悪いものであると考えられている。」

カリクレス 「はい。」

ソクラテス 「君は、口論、娯楽のための狩猟、戦争、これらがすべて対立の一種であることを認めるけれども、それらの対立が悪いものであると認めることはできるだろうか。」

カリクレス 「それらは対立の一種であると認めることができますが、それらが悪いものであることはまだ確実に認めることができません。」

ソクラテス 「ありがとう。」

ソクラテス 「またさらに、生存競争も対立の一種である。なぜなら生存競争とは、異なる個体ないし生物種同士が各々の生存圏を巡って相争うことであるから。」

カリクレス 「はい、生存競争は対立の一種です。」

ソクラテス 「しかしこの生存競争が善いものであるか悪いものであるかについては、人々の考えが分かれるだろう。というのも、あるひとはこれを推し進め、ある人はこれを推し進めるべきではないと主張しているから。」

カリクレス 「それはどういったことを指しておられるのですか。」

ソクラテス 「私はこのようなことを言っているのだ。人間と人間が殺し合うことは悪とされているね。」

カリクレス 「はい。」

ソクラテス 「それでは、人間と動物とが殺し合うこと、つまり狩猟がそれに当たるのだが、これについてはどうだろうか。」

カリクレス 「ある人は狩猟が善であると言い、別の人は悪であると言います。その狩猟が、たとえ食用の獲物を狩るものであっても、衣服製作のためのものであっても、その他単なる娯楽のためのものであっても、いずれにせよそれら各々が善であるか悪であるかということについて、人々の見解は一致を見ません。」

ソクラテス 「それでは、人間と微細なる生物とが殺し合うこと、つまり人間の免疫機能ないし医薬品による闘病がそれに当たるのだが、これについてはどうだろうか。」

カリクレス 「ソクラテス、そのような戦いを悪であるとみなす人がいて、またその人が『悪をなす生は生きるに値しない』と考える人であれば、何人も一瞬たりともこの世に生きることを許されることがないでしょう。」

ソクラテス 「それでは、以上言われたことを見ると、対立の中でも善いとされるものと悪いとされるものがあるのではないか。」

カリクレス 「その通りです。」

ソクラテス 「また、これまで考慮されなかった論点——例えば『ある人は対立こそがあらゆるものを殺していると言うが、ある人は対立こそがあらゆるものを生かしていると言う』あるいは『対立のあるところに苦痛が生じると言う人もいるが、対立のあるところに快樂が生じると言う人もいる』といったものがあるのだが——これらの論点も、結局のところ今のものと同じところに行き着くのではない。すなわち、我々は『対立の中でも善いとされるものと悪いとされるものがある』ということまでは言えるけれども、それ以上のこと、例えば『対立の中でも実際に善いものと実際に悪いものがある』とか『この対立は善い』『この対立は悪い』『すべて対立は善である』『すべて対立は悪である』とかいったことは決して言うことができないのではないか。」

カリクレス 「はい、述べられたいかなる論点を經由しても、対立についての議論はこの結論に行き着くものであって、他のところに行き着くものでも、そこから先に行き着くものではありません。」

ソクラテス 「それでは、はじめの方で言われた『この議論のなかで常に覚えておかねばならない』ことに照らしてみると、善い対立はこれを追求しなければならぬし、悪い対立はこれを抑制しなければならぬ、のではないか。」

カリクレス 「はい。」

ソクラテス 「すると今度は、ようやくここで次の二つの問題が見えてくるのではないか。つまり、第一に、善いとされる対立が実際に善い対立であって、悪いとされている対立が実際に悪い対立であることが確実であるかという問題。第二に、それらが確実であるとして、善い対立と悪い対立を区別する基準は何であるか、すなわちある種の対立が善いものであるのは何に依るのであって、他の種の対立が悪いものであるのは何に依るのであるか、という問題。これら二つの問題が我々の前に立ちはだかつているのではないか。」

カリクレス 「はい。」

ソクラテス 「そしてこれらの二つの問題の存在が明らかになったことは、単なる小さな進歩にとどまらないのではないか。なぜなら、我々のこの問題を、曖昧な議論や『それらしさ』または思惑によって明らかにしたのではなく、着実な推論によって明らかにしたのであるから。」

カリクレス 「そのように思います。」

ソクラテス 「ここで、『真正の対立は善い対立であり、偽りの対立は悪い対立である』という定式化を検討してみる気はないだろうか。」

カリクレス 「つまりそれは、どのようなことを言っているのですか。」

つまりこういうことである。戦争とは、戦争に参加する人間全員が弱者であらざるをえないような対立である。というのも戦争においては、誰しもが自分の手に取る武器によって自分を陥れるから。人が命を落とせば消滅するようなこの対立は、永続する真の対立ではなく、偽りの対立で、劣ったものである。また、口論とは、口論に参加する人間全員が弱者であらざるをえないような対立である。誰しもが自分の語る論法によって自分を陥れるから。このように、対立者の一方が他方に吸収されたり、対立者が皆ことごとく消滅したりするような対立は、一時的にのみ続く対立であり、真の対立ではなく（対立としての概念的規定を完全には満たしておらず）、同時に劣悪な対立であるという。

しかし哲学的アポリアにおいては、アポリアに参加する諸命題すべてが強者でありうるような対立である。この対立は一方の主張が他方の主張に決して吸収されることがなく、対立が永遠に存続する。一方が他方を圧倒したり双方が消滅したりするような対立は、真の対立ではない。常に両者の均衡が取れているような対立、すなわち参加者全員が強者でありうるような対立が、立派な対立であり、真正の対立であり（対立としての概念的規定を完全に満たしており）、優れた対立であるという。

戦争という永続しない、永続する前に対立者の片方が絶えてしまうような一時的な対立ではなく、時間に対して（つまり生成消滅が行われる、感覚によって把握される世界に対して）絶対的である（思惟によって把握される世界にある）がゆえに永続的対立である、哲学的アポリアこそ追求すべき対立である。そのような対立は、結果として、人々に多くの知見を与え、人々を謙虚にする、慣用的な意味でもまた「優れた」対立である。

ソクラテス 「カリクレスよ、この説にはどのような問題点が挙げられるだろうか。」

カリクレス 「この説は、これ以降検討されなければなりません。」

以降未完